

2026年度フィールドスタディC（京都企業の歴史と現在）見学報告書

実施期間：2026年7月2日（木）～4日（土）

教員名：佐々木 聡

（1）2026年7月2日（木）午後 川島織物セルコンを訪問

1日目の見学先は川島織物セルコンであった。今回の見学では、川島織物セルコンのものづくりの現場を見学し、伝統技術を継承しながら新たな価値を創造する企業の姿勢について学んだ。見学前は、工場というと多くの機械が稼働し、大人数で生産を行う場所という印象を持っていた。しかし実際には、想像していたより少ない人数で作業が行われており、一人ひとりの高度な技術や役割が製品の品質を支えていることを実感した。

特に印象に残ったのは、手織りによるつづれ織の製作工程である。職人が実際に織り上げる様子を初めて見学し、伝統技術が現在も受け継がれていることを肌で感じた。つづれ織は裏側から織り進めるため、大型の織機では機械の下に入り、小型の織機では手鏡を用いて完成面を確認しながら作業を進めるという工夫がされており、高度な技術と経験が求められることに驚いた。染色工程も非常に印象深かった。緞帳の仕上がりを左右する配色は重要な工程であり、職人がわずかな色の違いを見極めながら何度も色合わせを行っていた。こうした繊細な判断は機械だけでは再現できず、長年培われた経験や感覚があってこそ実現できる技術であると感じた。効率化が進む現代においても、人の感性だからこそ生み出せる価値が残されていることを改めて認識した。また、このような職人の感覚や経験そのものが、他社には容易に真似できない川島織物セルコンの競争力やブランド価値につながっているのだと感じた。

また、緞帳は完成までに数か月を要し、単なる舞台設備ではなく、公演や式典の始まりと終わりを演出し、観客の期待感や高揚感を生み出す役割を担っていることも学んだ。織物としての美しさだけでなく、人々の記憶に残る空間や体験を創り出している点に大きな価値を感じた。時間や手間をかけて制作されるからこそ、高い芸術性や希少性が生まれ、長く受け継がれる作品になるのだと考えた。

さらに、帯の需要が減少する中でも、長年培った織物技術を緞帳やインテリア製品、ラグなどへ展開し、現代の暮らしに合わせた新たな価値を創出している点も印象的であった。伝統をそのまま保存するのではなく、時代の変化に対応しながら技術を生かし続けることで、日本の文化やものづくりを未来へつないでいることを理解した。また、伝統工芸士と若手職人がともに製作を行うことで技術継承に取り組んでいることから、製品だけではなく「技術そのもの」を次世代へ残そうとする姿勢にも感銘を受けた。

今回の見学を通して、ものづくりの価値は効率や生産量だけで決まるものではなく、職人の技術や経験、責任感、そして長い時間をかけて積み重ねられる工程によって支えられていることを学んだ。今後は製品を見る際にも、価格や完成品だけではなく、その背景にある技術や製造工程にも目を向け、ものづくりが持つ本当の価値について考えていきたい。



(2) 2026年7月3日(金) 午前 オムロン京都太陽

7月3日の午前はおムロン京都太陽株式会社を見学した。これまで障がい者雇用に対して、できる仕事を任せるといった保護的なイメージを抱きがちであったが、実際には一人ひとりの障害の特性や得意なことを理解しそれぞれの能力を最大限に発揮できる環境づくりが行われていることに非常に驚かされた。特に印象に残ったのは人が機械に合わせるのではなく、その人が働きやすいように設備や作業方法を工夫することでそれぞれの特性に合わせたものづくりが実現されていたことである。障がいがあるから働けないのではなく、その人に合った働き方を職場全体で考える姿勢に多様な人が活躍できる環境の本質を見出すことができた。

また、同社で掲げられている「配慮はするが遠慮はしない」という言葉の意味を実際の工場を見学することで深く理解することができた。工場内では3S活動が徹底されており、「置けない君」による整理整頓や蛍光灯のひもの色分けなど誰が見ても迷わず安全に作業できる仕組みが随所に施されていた。こうした取り組みは障がいのある方への配慮であると同時に誰もがルールを守って仕事をするという意図が感じられた。必要な支援を行いながらも特別視せず、一人の社会人として責任を持って対等に働くことを期待する姿勢こそがこの言葉に込められた思いなのだと理解した。

こうした「苦手をサポートして得意を活かす」という自動化の方針は一人ひとりの人間と丁寧に向き合

っているからこそ実現できる温かい技術である。特に手に取るべき場所のランプが光るシステムなどは作業者が質問しづらいと感じて萎縮してしまうような心理的負担や苦手意識を物理的に補う工夫であり、誰もが不安を覚えることなく能力を発揮できる環境づくりに繋がっている。同社の自動化の根底には単なる生産性の効率化だけでなくその人がその人らしく働きやすくなるようにという人間に対する真摯な眼差しがあるのだと感じた。

今回の見学を経て技術が人の弱さを支え可能性を広げる瞬間を目の当たりにし、企業のあるべき姿を学ぶことができた。障がい者雇用を「支援」という視点だけで捉えるのではなく一人ひとりが企業を支える大切な戦力として誇りを持って活躍されている姿を見て、障がい者雇用に対する認識が大きく変わった。多様性とは単に違いを認めることではなく、一人ひとりの強みを活かせる仕組みを作りそれぞれが責任をもって活躍できる環境を整えることなのだと強く実感した。



(3) 2026年7月3日(金) 午後 オムロンコミュニケーションプラザ

7月3日の午後はオムロンコミュニケーションプラザを見学した。施設見学や創業者・立石一真とSINIC理論の説明を通じ、オムロンが歩んできた道のりや目指していく目標について知ることができた。見学前はヘルスケア製品のイメージが強かったが、実際には自動改札機など、日常生活のインフラ製品も数多く手掛けられていることを知り大変驚いた。中でも最も印象に残ったのは自動改札機の仕組みである。切符をどんな順番や表裏で投入しても最後には美しく整って出てくる技術の高さに驚愕した。ほんの数秒の動作であっても利用する人の立場に立って利便性を追求している姿勢に感銘を受けた。

SINIC理論に基づいた将来予測の先進性にも強い衝撃を受けた。1970年という半世紀以上も前の段階で数年先の予測も困難なような社会の変革を予見していた点には本当に驚かされた。科学・技術・社会の3つが互いに円環的な影響を及ぼし合いながら発展していく動的なシステムとして未来を捉える視点に圧倒的な先見の明を感じた。理論の中で現在は最適化社会から自律社会への過渡期に位置づけられているが、これは今まさに同社が進めているハードウェアを売るビジネスからデータやサービスを駆使して社会課題を解決するビジネスへの変革の原動力になっているのだと気づいた。

技術フロアでは、驚きの連続でまるで未来空間にいるかのような高揚感を覚えた。ジェンガの機械では、人と機械が共にものづくりを行う上での徹底した安全性を実感した。ロボットの動作中に少しでも手が近づくと、瞬時に止まる高度な検知・回避能力の高さに技術の凄みを感じた。さらに指で挟むだけで測定できる心電図にも驚かされた。工程が少なく簡単に持ち運べるハードルの低さは、離れた親戚の健康を確実な数値で確認し、万が一の際に、命を救うことにもつながる。医療を身近にする技術の実現が当事者だけでなく周りの人間の安心をも生み出し、社会全体の健康を促進しているのだと感じた。

オムロンコミュニケーションプラザでの見学は、精密技術が何通りにも応用・開発され、社会の安心や未来を形作っていることに本当の面白さを感じ、わくわくする気持ちが絶えない時間であった。一つの製品を完成させるだけでなく、より便利で使いやすいものへと改良を重ね続ける姿勢から、社会の変化やニーズに応えようとする挑戦の姿勢が伝わってきた。見学を通して養うことができた広い視野と未来予測の視点を物事の本質を見極める力として今後の学びに活かしていきたい。

(4) 2026年7月4日(土) 午前 松下資料館

最終日の7月4日午前は、松下資料館での学習となった。松下資料館は京都市南区に位置し、パナソニック創業者・松下幸之助氏の経営哲学や人生観を体系的に学べる施設である。館内には氏の生い立ちから事業の創業、経営理念に至るまでの歩みが、映像や展示を通じてわかりやすく紹介されていた。

見学に先立つ予習の段階で印象に残ったのは、松下電器は人を創る会社であるという言葉である。実際に館内では、従業員同士の距離が近く、全員が倫理観を持つ企業であったという説明があり、松下氏の「人を大切にする」という考え方が単なる理念にとどまらず、組織文化として根づいていたことがうかがえた。

また、激動の時代に貫かれた「対立しつつ調和する」という労使関係のあり方も強く印象に残った。企業と労働組合が対立を前提としながらも、互いの社会的使命や福祉向上を通じて調和を目指すという考え方は、一見理想論に思えたが、当時の労使協議の資料からは、それが実際の経営判断として貫かれていたことが伝わってきた。

展示の中では「人生の生き方・考え方」にも学びが多かった。「まず受け入れる」という教えや、経営

者が自分自身を俯瞰し感情や先入観にとらわれず物事を見つめる「自己観照」という考え方は、経営者に限らず一人の社会人としても大切な姿勢であると感じた。また、「早わかりキーワード集・人生観」の電子パネルからは、成功する経営者には基本的な知識に加え、前例にとらわれない発想の柔軟さが不可欠であることを学んだ。

さらに、「素直な心になるために」として示された、すべての人の中に自分にとっての師を見出し、くもりのない心で物事を見るという教えも心に残った。松下氏が日々の地道な積み重ねと自己への向き合いを決しておろそかにしなかったという事実は、大きな成功を収めた人物であっても謙虚さを貫いていたことを物語っている。

利益の追求にとどまらず、社会的責任・人材育成・共存共栄という理念に基づく松下氏の経営姿勢は、現代のステークホルダー経営にも通じる普遍的な価値を持つ。今回の見学は、理念を掲げるだけでなく、それを日々の意思決定や組織運営に落とし込み続けることの難しさと重みを実感させるものであった。中には、来年度から社会人としてのキャリアをスタートする者もあり、それぞれが松下氏の教えを胸に、これからの歩み方を見つめ直す良い機会となった。



以上

佐々木聡 専任教授